

—高校の授業はこう変わる—

「自学自習できるような指導」を考える

岐阜県立揖斐高等学校

谷口雅英

1. はじめに

本稿では、今度の高等学校外国語学習指導要領第4款の内容の取り扱い、「(3) 辞書の活用の指導などを通じ、生涯にわたって、自ら外国語を学び、使おうとする積極的な態度を育てるようにすること」に焦点を当てて執筆させていただきま。中学の新学習指導要領におきましても、「力辞書の使い方に慣れ、活用できるようにすること。」が謳われていますが、実態としましては、なかなか指導が十分になされていないのが現実です。

時代の中には、流行というものがあるようです。英語教授法もそうです。一時は一世を風靡したオーラル・メソッドも、徹底的に非難されるという時代がありました。現在、母語をできるだけ使用しない英語の授業が声高に叫ばれています。しかし、これも一種の流行の現象ではないか、つまりそちらの方に振り子が振り過ぎている状況にあると、私は考えています。

英語の授業で最低限身につけさせなくてはならないのは、今も昔も、辞書を使えば何とか英文を読み進めていける力ではないでしょうか。私の勤務校では、この最低限のことを身につけずに卒業していく生徒が、圧倒的に多いという現状があります。

そこで、辞書の指導の他に、すべての生徒が文法参考書を使いこなすこと、疑問文・否定文を作ることができることを目標に取り組んでいます。これらのことができない状態で、コミュニケーション能力の育成も何もないと思います。

2. 教え子の便りから考えたこと

昨年度末、教え子から、次のような便りをもらいました。

お久しぶりです。先生、お元気ですか。驚かれるかもしれませんが、私は今、フィリピンでもセブという小さい島にいます。とても安全なのんびりとした国です。マニラとはかけ離れた国だと思います。

今、韓国人、フィリピン人、日本人と生活しています。この国のいい所は物価がアジアの中でもダントツに安いところです。こちらの人々の給料も恐ろしく安いです。だいたい1日の日給が400円とかで月給1万円くらいです。実際に本当に貧乏な国です。

しかしセブの人々は本当に心が温かくて、人と人との間に壁というものが存在しません。日本のハイクオリティは本当に素晴らしいと感じるようになりましたが、日本が失っているもの、物の大切さも、同時に本当に考えさせられます。フィリピン人の友達も何人かできて、旅行ではなく留学しなければ見られなかった事が沢山ありました。

フィリピンは生活してく上でけっしていい環境ではないけれど、その生活に直に触れたことが自分の経験としてすごく大きなものになりました。こう言うのはセブの人々に失礼ですが、自分の上ばかりを見るのではなく下を見れたことで、自分の価値観がまた変わりました。

彼らは日本に対してすごく憧れをもっているけど私も彼らを尊敬できると思えた事、心の差や国の力の差など韓国人やフィリピン人と様々な比較ができたことのすべてが勉強になって、ここへきて良かった！と思えました。

海はほんとに綺麗で是非見てほしいですが、逆に見どころが海しかなく旅行として来るとなにもない島なので退屈だと思います。……

彼女は高校時代、英語が苦手な生徒でした。英語学習にも前向きではありませんでした。そんな生徒が海外で英語を勉強しているのですから、大変驚きでした。書いてある内容も知的です。日本、世界そして自分を見つめ、考える視点があります。少なくとも、海外旅行でショッピングやグルメに明け暮れるようなレベルではありません。

彼女が英語を勉強しようという気持ちになったきっかけは、家族で行った海外旅行で、英語ができることのすばらしさを痛感したようです。ニュージーランドでワーキングホリデーの制度を利用しながら、1年くらいファームステイすることを目標に英語の勉強を始めました（彼女は農業高校動物科学科の卒業生です）。日本の英会話学校に通っていましたが、学校に収める1ヶ月の授業料程度で、フィリピンに1ヶ月滞在できることを知り、渡航を決意したそうです（フィジー島も同じくらいの費用で滞在できるとか）。そして、今フィリピンに魅せられているという状況です。

教え子の便りを読んで、動機づけがいかに大切であるかを痛感しました。2009年6月に放映された日本テレビ系の『地球便』という番組で、マレーシアで最も評価の高い日本料理レストランを経営する大阪府八尾市出身の38歳の青年を取り上げていました。彼は中学校のとき両親が離婚し、高校へ行かないで料理の世界に入りました。高校へ行った同級生に負けないよう、彼は日本料理の世界で修行を重ねました。自分の店を持つとした当時、マレーシアのランカウイ島には日本料理のお店が一軒もなかったことを知りました。独力で現地の言葉を習い、今は数人の現地の人を使いながら、マレーシアでNo.1の日本料理レストランを経営しています。

大学入試などの強い動機づけを持っていない生徒に対して、特に英語に強い苦手意識がある場合、動機づけを行うことは大変難しいと思います。そのような生徒に対して最も大切な指導は、「学び方を教えること」だと思います。今は必要性など全く感じていないけれど、必要性を感じたとき、改めて英会話学校などへ行かなくても、自分で学習していける力を身につけさせることです。教え子や番組に登場する人たちを見ていると、言語を真に身につけたいという環境になったとき、人間は想像もできない力を発揮するようです。

3. 辞書を使いこなす指導

辞書を使って英文を読み進めることができる力の育成として、2つの段階を考えました。第1段階は、調べたい単語を正しく早く検索できる段階、第2段階は、検索した箇所から適切な意味を

選択できる段階です。どちらの指導にも、全員が同じ辞書を購入すると大変効率的です。本校では、『エースクラウン英和辞典』（三省堂）を生徒全員に持たせています。この辞書は、見やすさ、引きやすさ、基本語彙の説明、収録語彙数、付録の充実、価格という点で、同程度の他の辞書を凌駕していると考えています。

授業では、1時間に1回は辞書を引くような展開を考えています。辞書引きについては、単調な作業を活性化するために、競争の原理を取り入れています。辞書を引かせるときは、全員起立させ、第1段階の指導では該当する単語を引いたら着席、第2段階の指導では該当する意味を見つけ、それが正しいときに着席を許可します。

第1段階の指導では、1つの単語について、発音記号と読み仮名と最初に書いてある意味を書き込む作業を30秒以内に行えることを目標としました。発音記号と読み仮名を書かせたのは、並行して発音記号の指導も行っていたからです。ワンランク上の辞書や多くの英語教材には読み仮名はついていません。自学自習するために、発音記号を読めることも必要と考えました。

1学期の中間考査まで、5分で10個の単語を引くことという作業をほぼ毎時間行います。GWの課題として、100個の単語を引かせます。GW前にはこの目標をクリアできる生徒は皆無でしたが、GW直後には各クラス数名ずつ目標をクリアし、1学期中間考査直前にはクラスの半数以上の生徒が目標をクリアできるようになります。

中間考査以降は、第2段階の指導に入ります。この指導には「記号づけ」の指導が効果的です（寺島1989参照）。記号によって英文の構造が浮き彫りになり、どの品詞を検索すべきかわかりやすくなります。といっても、指導はなかなか大変です。品詞で言えば、私自身も高校で辞書を引くようになってから、やっと理解できたというのが本当のところだと思います。しかし、外国語を学ぶためには、語順や品詞の理解は不可欠です。主語・目的語といった言葉の概念も理解させる必要があります。

1年の学年末までには、第1段階の指導は全員がクリアします。授業中、単語の意味を質問したときに、こちらが指示しなくても辞書を繰り出す生徒も多く出てきます。第2段階の指導はそんな

訳にはいきません。時間がかかるかもしれませんが、繰り返し行うしかないと考えています。

4. 疑問文・否定文を作る指導

次に、疑問文・否定文を作る指導について考えます。外国語学習において、コミュニケーションの喜びを体験させることは最も大切なことです。しかし、たとえば相手に何かを尋ねるというコミュニケーションが達成されたとして、それが単に表現を暗記しただけで、他のことを質問する力が転化していない状態ではどうでしょうか。喜びは刹那的なもので、さらなる喜びを味あわせることは難しいでしょう。平叙文から疑問文を作ることができることは、コミュニケーションの観点から発展性があることは言うまでもありませんが、生徒にとって一時的なコミュニケーションができるより、はるかに大きな喜びを感じるのではと考えます。

では、疑問文・否定文を作ることができない状態で高校に入学した生徒に対して、どのように指導すればよいのでしょうか。これができるようになるためには、英文中の主語と述語動詞を指摘できなくてはなりません。述語動詞について言えば、be動詞と一般動詞の区別、助動詞と本動詞を指摘する力が必要です。そういう意味で、英語が苦手な生徒についても、基本的な文法用語はきちんと定着させる必要があります。

授業は、前もって英文をフレーズに分け、フレーズごとに意味を取り、一文の意味を考える訳読式です。各課のすべての英文を板書し、最低限必要な文法用語を使いながら、一文ずつ文構造と単語の意味を確認しています。一文の内容を理解したあと、すぐに音読に移ります。

日本のような言語環境で外国語を習得しようとすると、音読練習が欠かせないと考えます。しかし、やみくもに音読すればよいということではなく、英文の中の1つ1つの単語、句、節、あるいは段落の中の1文1文の意味や働きをしっかりと理解した上で、伝達内容を相手に伝える、あるいは自分自身に言い聞かせるつもりで音読をしなければ、あまり効果は期待できません。授業でもそのような音読の仕方を実践する必要があります。そのような学習方法を繰り返すことで、生徒

は外国語の学び方を学ぶことになります。

音読練習の後、暗唱練習に入ります。全員を起立させ、暗唱したら着席し、教師に暗唱した英文を発話します。数人がそれを達成したら、「このことを相手に確認するために聞いてみると」と呼びかけて、疑問文作りの練習を行います。指名して答えさせますが（席は常時、隣同士のペアになっていて、相談してもよいことになっています）、生徒にとって難しいのは述語動詞が一般動詞の場合です。一般動詞の疑問文はいきなり作らせるのではなく、述語動詞を強調する表現を間に挟みます。『VISTA English Series New Edition I』（三省堂）の第1課の例文を使うと、次のようになります。

We see mountains and oceans.

→ We do see mountains and oceans.

→ Do we see mountains and oceans?

その疑問文を全体で復唱すれば、疑問文作りの練習と音読を兼ねることになります。否定文についても同様です。

このような授業形態について、1文ずつが細切れになり、読みの楽しみがなおざりになってしまおうというご指摘があるかと思えます。確かに、そういう部分は否定できません。それを補うために、教科書よりもっと簡単で、単語の意味などがすべてヒントとして書かれていて、辞書など引かなくても読んでいけるような教材を別に準備する必要があります。また、教科書のすべての課を先ほどのような指導に充てるのではなくて、精読して疑問文・否定文作りと音読を徹底する課と内容理解に留める課とを、予め決めておいてもよいかもしれません。

文法参考書の指導について書くスペースがなくなりましたが、先ほどの辞書指導やここで述べた文構造を確認する指導の中で、品詞の識別や文法用語の定着を図る中で、授業で折に触れて使っていけば、辞書よりはるかに早く検索などはできるようになります。

5. おわりに

昨年の3月に新学習指導要領が告示され、今ま

で以上に発信型の授業が求められているような内容になっています。また、今回はさらに、「…次のような活動を英語で行う」とも書かれており、これにつきましては新聞等でも話題になりました。この背景には、「学校で学ぶ英語は役に立たない」という社会からの見えない力が、教育政策を動かしていったという側面もあると思います。

こういった状況について鳥飼（2010）は、次のように述べています。

しかし、英語教員はそろそろ「言われっぱなし」を返上し、ありとあらゆる機会を捉えて、現場の実情、現実の課題を発信すべきではないか。発信力が必要なのは、生徒や学生だけでなく、教員も同じである。分かりやすく、論理的に、あきらめずに忍耐強く説得する力が求められている。

このような発信をするに当たって、寺島（2009）は、非常に有益な書籍です。賛否は別として、是非ご一読をお願いしたいと思います。

学校教育の目的は、教科内容を教えることだけでなく、学び方を教えることです。卒業後、自分で勉強していくことができるようにすることです。やったことがないことをしなくてはならないとき、人は最良の方法で自分を教育しなくてははいけません。その時、学び方を知らないと、新しいことに対処できません。一方、学び方を知っている人は、成功する可能性が高いと言えます。

外国語学習で言えば、それは英語という言語のみに通用するものでなく、先の青年の例が示すように、学習者が英語以外の外国語を習得しようとしたときにも、通用するものでなくてははいけません。中学・高校と英語が苦手で過ごしてきた生徒にとっては、むしろ英語以外の外国語の方がおもしろいかもしれません。英語に関しては相当の差がついてしまっていますが、それ以外の外国語では大学入試を通過してきた生徒たちとも、同じスタートラインに立っているからです。

高校を卒業すると、教科書というものがありません。自分で教材を見つけなくてははいけません。どんな教材でどのように学習するかということも自学自習する上で大切です。たとえば、歌は外国語を勉強する上で、とても有効な教材だと考え

ています。その学習方法などについて、谷口（2010）で書かせていただきました。興味がある方はご覧ください。

教室を英語が話されている空間に見立ててコミュニケーション活動を行うことは、必要だとは思いますが、日本という言語環境での自学自習の観点から見れば、日常の学習の成果を試す、発表するという、スポーツで言えば、試合に位置づけられるべきものだと考えます。最も時間を割かなくてはいけないのは日常の地道な練習であり、それを繰り返していくことによって、成果も表れ、生徒は学び方を学んでいきます。この地味な指導について、マンネリ化するのではなく、絶えずより良い指導のあり方を模索していくことは、コミュニケーションが声高に叫ばれる時勢の中でも忘れてはいけないと思います。

【参考・引用文献】

谷口雅英

「英語授業実践記録 歌を使って言語4技能を育成する」
<http://www.shinko-keirin.co.jp/koei/english/jissen/32.html> (2010)

寺島隆吉

『英語にとって学力とは何か』（三友社 1989）
 『英語教育が亡びるとき』（明石書店 2009）

鳥飼玖美子

『英語教育』3月号「現場から発信を」
 (P41 大修館書店 2010)

